

門中墓の移動と継承 —那覇・読谷の士族系門中の事例—

阿利よし乃¹⁾

Movement and Inheritance of the Patrilineal Descent Group Tomb
: The case of Noble Class *Munchuu* in Naha and Yomitan

Yoshino Ari ¹⁾

はじめに

本稿では那覇・読谷の士族系門中を対象に、門中墓の継承と集団の活性化を試みようとする人びとの事例を報告する。2016年に沖縄県立博物館・美術館へ項姓砂辺門中（以下、砂辺門中と表記する）の墓を移動するとの連絡が入り、前任学芸員が移動前の墓を調査した^(註1)。墓室内には59基の蔵骨器が納められていた。その中には「隆武六年」(1650年頃)の銘書きや「久米村」の文字が彫られている石厨子などがあった(写真1)。さらに砂辺門中では家譜が大切に保管されていた(写真2)。その家譜と石厨子は、沖縄の歴史と文化を知るための貴重な資料である。それらの砂辺門中をめぐる一連の資料は、本家当主のご厚意により当館へ寄贈していただく運びとなった。その後、砂辺門中は読谷村に新しい墓を造り、2019年には墓移動から2回目のシーミー(清明祭)が行われた。筆者はその様子を観察し、聞き書きを進めている。本稿では現段階の資料を整理し、報告したい。

1. 先行研究と本稿の目的

墓の移動と祖先祭祀の継承は、家や親族集団にとって重要かつ深刻な問題である。近年、この問題について数多くの考察がなされている。沖縄県をフィールドとした研究に限ってみても、次のような指摘があげられる。

まず墓の移動については、都市移住者の祖先祭祀に関する考察がある。越智郁乃は沖縄本島北部や離



写真1 門中墓に納められていた石厨子

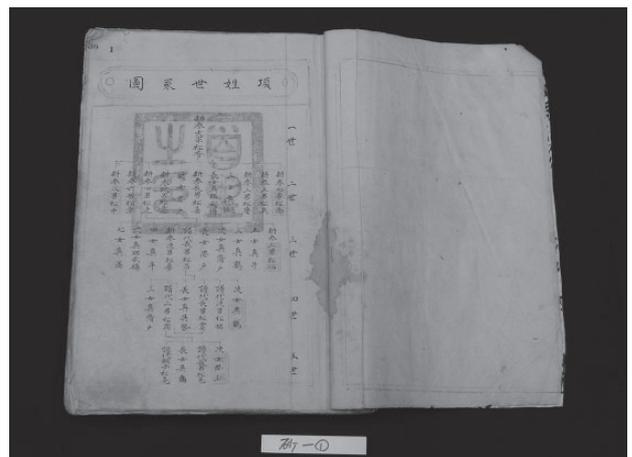


写真2 砂辺門中の家譜

¹⁾ 沖縄県立博物館・美術館 〒900-0006 沖縄県那覇市おもろまち3-1-1
Okinawa Prefectural Museum & Art Museum, 3-1-1, Omoromachi, Naha, Okinawa, 900-0006 Japan

島から那覇へ移住してきた人びとが、様々な葛藤を抱えながら墓の移動を選択している様子を丹念に著している [越智2018]。また、墓の移動について考える際には故郷の墓制の変化に注目すべきだとの指摘もある。沖縄本島北部伊地村落から那覇に移住した人びとの中には、移住先に墓を新設する事例もあれば、故郷の墓を使い続ける人びとも存在する [早坂2018]。

さらにまた、墓制の分析においては古村や新村といった村落の性格と人びとの生業形態を踏まえるべきだとの見解もある [長嶺2012]。沖縄本島南部港川の糸満漁民は定住後180年余り経っても港川に墓を新設せずに、糸満にある門中墓を使用し続けている [長嶺2012]。

これらの先行研究は、人の移動と墓の位置が必ずしも重なるわけではないということを示している。墓の利用の仕方と墓所の選定には、祖先を祀る人びとごとの決定要素があるのではないだろうか。

つぎに、門中の祭祀継承に関する考察に目を向けていきたい。武井基晃によると、士族系門中では祭祀継承者の不在や位牌継承上の禁忌に直面したときに、たとえ規範通りでなくても、祭祀を続けるために実現可能な対処がなされている [武井2012]。近年の沖縄社会では、位牌継承に最適な直系男子がいない、または継承者はいるが県外で暮らしているといった状況が各地でみられる。武井が取り上げた事例に登場する人びとは、そのような事態に直面したとき、女性たちによる位牌祭祀の実行や班長制の導入という方法を選択していた。そのような、祭祀の継承過程にみられるその時々現在の判断の積み重ねを分析し続けることの重要性が指摘されているのである [武井2018]。ここでいう現在の判断とは、「現在進行中の変化における当事者による判断」を意味している [武井 2018 : 120]。

2019年の砂辺門中のシーミーでは、県外在住の本家当主や「砂辺門中を元気にする会」の顧問たちによってさまざまな提案がなされた。その提案の背景には、砂辺門中における祭祀継承の現在の判断が見え隠れしている。それを踏まえて本稿では、2019年のシーミーの事例から砂辺門中の祭祀継承の現在の判断を捉えることを目的とする。

2. 項姓砂辺門中とその墓

項姓砂辺門中は新参の士族系門中である。一世は1642年に生まれた松香という人物である。本家当主の家系は沖縄戦の前に県外に疎開し、そのまま生活の拠点を県外に置いている。現在の本家当主は11世で、関東在住である。その一方で、沖縄本島中部読谷村にはナカムートゥヤーという分節集団の核となる家がある。成員の数は那覇に約45世帯、読谷に約55世帯である。門中成員の中には家族墓を有している世帯も多い。そのような世帯では門中シーミーを行ったあとに、それぞれの家の墓でのシーミーが実行されている。

2019年現在、砂辺門中の成員が集まるのはシーミーのみである。読谷のナカムートゥヤーの先代当主が元気だった2006年頃までは、ナカムートゥヤーでウマチーが行われていた。現在のウマチーでは、数軒によってナカムートゥヤーでの祈願が行われている。また、ナカムートゥヤーには行かずとも、門中と関わりの深い拝所に赴いてウマチーの祈願をす



写真3 那覇にあったムートゥバカ



写真4 ムートゥバカの墓室の様子

る成員もいる。

砂辺門中では門中墓のことをムートウバカと呼んでいる（写真3、4）。以前のムートウバカは那覇の国際通り近くにあった。ムートウバカには2つの墓口があり、墓に向かって右側にムートウ（直系の人びと）が納められ、左側には傍系の人びとが入っていたと伝承されている。戦後にはムートウバカを使用していた成員が家族墓を作り、ムートウバカから新しい墓へ遺骨を移すことも多くあった。

3. 「砂辺門中を元気にする会」の結成

砂辺門中の中には「砂辺門中を元気にする会」という組織がある（以下、元気にする会と表記）。元気にする会はその名称が示すとおり、砂辺門中の活性化を目的とする組織である。元気にする会は2005年に発足した。ここでは元気にする会発足の経緯について、二つの時期のシーミーに注目しながら記述を進めていきたい。

1960年代の頃のシーミーには、30世帯、50人ほどの成員が参加し、とても賑やかに行われていたという。本家当主も県外から帰郷し、シーミーと合わせて学事奨励会が行われていた。学事奨励会では、ナカムートウヤーの当主から高校に入学する子どもたちへご祝儀、中学校に入学する子どもたちに鉛筆やノートが贈られた。

しかし、2005年頃になると、シーミーの参加者が減少するようになった。シーミーの参加世帯は20世帯弱に減り、読谷からの参加は3、4世帯にまで落ち込んだ。読谷からは、シーミーに参加するナカムートウヤーに会費を預けて、シーミーには参加しないという世帯が増えるようになった。そのような状況に危機感を感じた一部の成員たちによって、元気にする会が結成された。

結成当時の役員は次の3名であった。会長はうるま市在住の64歳男性、会計は南城市在住70歳男性、顧問は那覇市在住76歳男性である（註2）。

元気にする会の最初の仕事は、門中成員の名簿作成であった。元気にする会とナカムートウヤーで協力しながら成員へ電話をかけて、直接確認をとった。また、読谷村から行政資料を取り寄せるなどして確認作業を行った。また、シーミーでは成員へ名簿を配布して分家が増えていないかどうかを調べた。こ

の名簿作りには3年が費やされた。

元気にする会の発足により、門中成員へシーミーの案内状が發送されるようになった（写真5）。その案内状は、シーミーに参加できるか否かを重視せずに、県外の成員へも發送された。その理由は、門中からの案内が届けば、県外で暮らしていても「あなたは砂辺家の子孫ですよ」と伝えることができるからだという。ある時は、誤って中学生男子に案内を送ってしまい、シーミーではそのエピソードを成員の前で披露して「あなたは砂辺家のクワンマガ（子孫）だから上等だよ」と激励したこともあった。

元気にする会が行ったもう一つの新しい試みは、^{みつきかい}三月会との連携である。三月会とは砂辺門中の婦人部のことで、模合で親睦を深めながら支えあっている人びとである。元気にする会は、この三月会にシーミーの供物の手配と当日の儀礼進行の補佐を依頼した。2005年頃の三月会の人数は約10人だった。

那覇にムートウバカがあった頃は、シーミー当日の昼前になると三月会の女性たちが公設市場に集合して準備に取りかかった。三月会のメンバーは元気にする会から預けられた予算を元に、餅や天ぷらなどの供物をたくさん購入し、成員へ供え物を持ち帰らせるようにした。このように元気にする会が予算を確保し、三月会がそれを運営することで、シーミーの参加者が次第に増加していった。

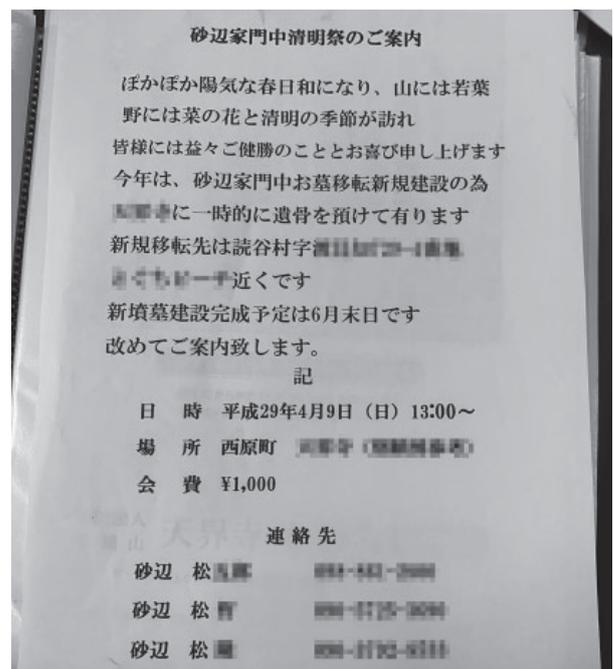


写真5 平成29年のシーミー案内状

4. 墓の移動

ムートゥバカは那覇市の公園整備区画範囲内に位置していた。そのため、砂辺門中は墓のある土地を市に明け渡さなくてはならない状況になった。そこで、元気にする会と関東在住の本家当主による話し合いが行われた。その話し合いでは、ムートゥバカの土地を那覇市に譲り、新たな墓造りを行うという方向性が定められた。

その後、那覇市とのやりとりや会員との調整が進められることになった。本家当主は墓地の明け渡しと墓の新築の手続きを元気にする会会長に委任し、着々と準備が進められた。

墓を造る場所の選定には1年を要した。墓を那覇に建てると駐車場の確保が難しく、読谷からやってくる会員には不便である点、さらに会員の半数は読谷在住であることが考慮され、読谷に墓を新築することになった。それから建設が進められ、2017年7月に新しいムートゥバカが完成した(写真6)。新しいムートゥバカでは墓口を一つにし、ムートゥ(直系)と傍系を分けることなく同じ墓室に納めることになった。

墓の落成祝いには多くの会員が集まった。また、宗家当主によって砂辺門中の系図を大きくプリントしたロールスクリーンが作成された。

墓の移動が終わり、手続きが済んだ2019年には元気にする会の役員交代が行われた。新しく会長となったのは、沖縄市在住65歳のナカムトウヤー生まれの男性である。



写真6 新しいムートゥバカ

5. シーミーの事例

2019年4月7日に読谷の新しいムートゥバカでシーミーが行われた。シーミーの前日には元気にする会を中心に墓にテントが組み立てられ、当日の11時にはスピーカーとマイクがセットされた。テントの下には系図のロールスクリーンが掲げられた。墓に参集した人々はその系図を眺めながら自分たちの系譜上の位置を確認し、会員との再会を喜んでいて(写真7)。その傍らには元気にする会会計へ会費を納入する会員もいた。この年のシーミーには那覇と読谷から多くの会員が参集し、参加者は約50人だった。この日の供物の手配は元気にする会会長が中心となって行っていた。

11時20分には会員がぞくぞくと集まり、女性たちによって供物の準備が行われた(写真8)。その一方でナカムトウヤーの男性が線香とウチカビ(紙銭)を参加者一人一人に配り始めた。会員はその線香とウチカビを受け取ると、祖先に向けて祈願した。その後すぐに、線香とウチカビが会長によって回収され、一同そろっての祈願が行われた。

11時30分には会長によって香炉に線香が立てられ、本家当主が先頭に着座した。そして、元気にする会顧問の号令によって全員での祈願が呼びかけられ、一同で手を合わせて祈願した(写真9)。その後、本家当主によって会員から集められたウチカビが燃やされ、祖先への贈り物とされた(写真10)。それから共食の時間に入り、元気にする会のメンバーによる進行が始まった。



写真7 系図をみながら語り合う会員たち



写真8 供物やウチカビを準備する女性たち



写真10 ウチカビを燃やす本家当主



写真9 祈願の様子



写真11 本家当主の挨拶

プログラムは本家代表挨拶からはじまった。その挨拶の中では、現在の当主によって「ムンチュー発足380年祭」への呼びかけがなされた(写真11)。宗家当主による挨拶は次のとおりである。

「第一世の松香が生まれたのは1642年。その400年祭というのを考えていたが、400年祭まであと20数年待たなくてははいけない。とてもじゃないけど、僕はそこまで自信がない。それで、今日ここで申し上げたいのは、380年祭を行おうと考えている。380年は2022年だが、それはもう2年ぐらい前倒しにして、例えば、来年辺りに砂辺松香以下、いわばムンチュー発足380年というような形に持って行きたい。」

当主の挨拶には大きな拍手が起こり、元気にする会会長から380年祭への協力願いが重ねて呼びかけられた。その後には、元気にする会の顧問である90歳長老の挨拶があり、続けて2名の同会顧問たちによる挨拶が行われた。その概要を紹介したい。

(1) 松という字について

嘉手納町在住82歳男性の挨拶は次のとおりである。

「砂辺というと、戦前に生まれた人のほとんどの名前には松という字が入っている。そのため、名前を見ると『イチムン ヤッサーヤー(同じ一門だな)』と分かる。しかし、そうすると同姓同名があまりにも多い。系図をよくみると分かるように、同姓同名の人がたくさんいる。そのために、私たちの世代の子どもたちからは松が入っていない人が多い。しかし、これからの世代は同姓同名で失敗することはもうおそらくないと思う。今の若い人たちからは、やっぱりまた男の子に松の字をつけてみたらどうかという気がする。」

これは私からの提案です。それはやはり、松という字が入ると、イチムンであるという親しみを感じる。イチムンであれば、何でも頼めるし、本音で物が言える。イチムンだからお互いに支え合うことができるという気がする。ですから、今の若い人たち

の時代からは松の字をつけてくださいというのが私の挨拶です。」

(2) 墓じまいについて

続いて、沖縄市在住78歳男性は2019年3月13日の琉球新報の一面を掲げて挨拶を始めた（写真12）。その見出しは「墓じまい・移転急増」である。その記事では、沖縄県内で移住に伴う墓の移転や継承者不在を理由とした墓じまいが増加していることが報じられていた。元気にする会顧問はその報道内容を説明したうえで、次のように述べた。

「現在は少子化で跡継ぎの子孫がいないところもある。砂辺門中にもそういう方達が絶対にいると思う。跡継ぎがいない遺骨は永代供養や納骨堂ではなく、門中のお墓に入れて、みんなでこの門中のお墓を盛り上げようという話を今後進めていってほしい。そうすることで会員を増やしていきたい。最近門中の法人化のニュースもあるが、砂辺門中のような小さな門中には向かないと思う。

現在どこの門中でも80歳前後の参加者は多いが50歳以下の人は少ない。それが悩みの種である。この点についてもみんなで話し合っていきたい。」



写真12 顧問による挨拶

6. 門中や墓に対する考え

宗家当主と元気にする会の人びとのシーミーの挨拶からは、それぞれが門中と墓の継承について思いを抱いていることがわかる。2019年のシーミーを観察した後に、本家当主や元気にする会顧問への聞き書きを行った。その資料をもとに、それぞれの立場ごとの考えを整理してみたい。

まず、宗家当主は次のように語っている。「本来

はウマチーやシーミーは当主が先頭に立ってやるべきである。しかし、自分が沖縄から離れて生活していることもあり、上手くいっていない、みんなに申し訳ないという気持ちである。今度計画する380年祭を砂辺門中の決起集会にしたい。」

つぎに、元気にする会顧問は砂辺門中の墓利用の現状について具体的な事例を語った。その事例はつぎのとおりである。

図1は今年のシーミーに参加したある世帯の事例である。記号が塗りつぶされた人物は2019年のシーミーに参加したことを表している。

図1の世帯は門中墓を利用しておらず、家族墓を持っている。A、B、Cの上位世代、すなわち（I）の世代の頃に読谷に家族墓を造った。この世帯のうち、2019年の門中シーミーに参加したのはAとBの妻であるC、さらにその息子であるDである。Eとその妻子は門中シーミーには参加しなかった。しかし、そのE世帯は自分たちの父親や祖父母が眠る家族墓でのシーミーには毎年欠かさず参加している。

この世帯の今後の墓継承について注目すると、将来は墓の継承者が不在となる可能性がある。Bとその上位世代（I）を祀るものとしては現在DとEが健在であるが、その下位世代（IV）には継承者となるべき男子がいない。そのため、この世帯では将来墓を継ぐべき子孫を探すことが困難になることが予想される。

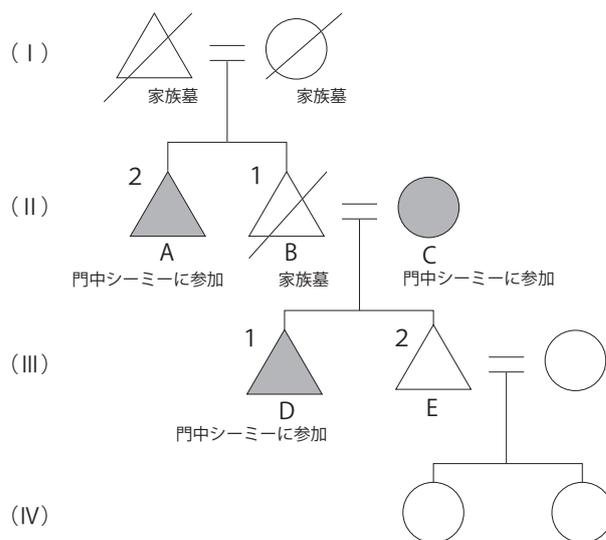


図1

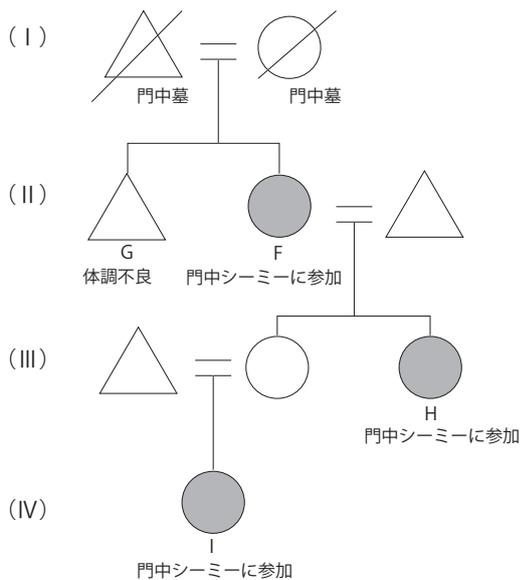


図2

つぎに、図2をみていきたい。図中GとFの両親は那覇市のムートゥバカに葬られていた。その遺骨は墓の移動とともに読谷の墓へ移葬された。GとFはこれまでずっと那覇のムートゥバカでのシーミーに参加し続けてきた。2019年においても、Gは体調不良のため参加できなかったが、Fは両親が眠る墓を訪れて娘Hと孫Iとともに祈願を行った。図2をみると、この世帯においてもGとFの下位世代（Ⅲ）においては父系でつながる継承者がいないことがわかる。

元気にする会顧問は、このような跡継ぎのいない成員の骨が納められている墓を墓じまいするならば、市町村の納骨堂や民間の永代供養を選ぶのではなく、読谷のムートゥバカで祀ることにより砂辺門中全員で祖先を祀り支えることができると語った。

7. 事例の検討

これまで、砂辺門中のシーミーの事例から門中墓の継承に関する立場ごとの考えを記述してきた。ここではそれらを検討してみたい。そのためにまず、墓の移動前の人びとの状況を振り返ってみよう。

砂辺門中は那覇にムートゥバカを有していた頃から門中墓の継承について懸念事項を抱えていた。一つは当主が県外在住であるため、祭祀の実行を主導することが難しいという点である。そしてもう一

つは家族墓を新設する成員が増えたことによって、ムートゥバカを使用する成員が減少したこと、それに伴ってシーミーの参加者も減っていたことがあげられる。

その問題を解消するために、砂辺門中は元気にする会を結成することで墓と祖先祭祀を維持していた。そのような中で那覇市の都市計画に伴う公園整備を契機に墓地を明け渡すこととなった。

その状況下で砂辺門中は、ムートゥバカの読谷への移動を選択した。墓所選定の決め手となったのは読谷にナカムトウヤーがあり、成員の半数が生活しているという点である。また、駐車スペースを確保できるために利便性が高いという点も理由の一つであった。

そのように、砂辺門中は祖先祭祀を続けるなかで数々のその時々判断を積み重ねてきた。それを踏まえて、2019年のシーミーの事例に注目していきたい。

シーミーでは本家当主と元気にする会顧問によっていくつかの提案がなされた。それは大きく二つに分類することができる。それらを整理したのが表1である。

No.	提案内容	門中墓継承に対する考えとの関連
1	ムンチュー発足380年祭の実施	門中意識の強化を目指している
2	新しく生まれてくる子どもに「松」の字を使って名付けてほしい	
3	若者の行事への参加を促すシステムづくりの呼びかけ	祖先祭祀の担い手を増やしたい
4	跡継ぎのいない遺骨を墓じまいしてムートゥバカで祀る	

表1 シーミーにおける提案の整理

まず、No.1のムンチュー発足380年祭の実施とNo.2の子どもに「松」の字を名付けてほしいという提案は、門中意識の強化を目指してなされているといえよう。また、その提案に連なるものとしてNo.3の若者の行事への参加を促すシステムづくり、No.4の跡継ぎのいない遺骨をムートゥバカに納めて門中成員で祀るという提案には、祖先祭祀の担い手を増やしたいという人びとの望みを見出すことができる。

そのような砂辺門中の人びとの望みからは、読谷に新設した墓を継承していきたい、さらには祀るべ

き子孫の不在によって行き場を失う祖先を生み出したくないという考え方を知ることができる。そのような考え方によって生じる現代的判断をもとに、砂辺門中の人びとは祖先を祀り続けようとしているのである。

8. おわりに

2019年のシーミーの事例という限られたデータから砂辺門中の墓の移動と継承について若干の検討を試みた。今後も引き続き調査と分析を重ねていくことで新参の士族系門中の祖先祭祀についての理解を深めていきたい。

また、本稿で取り上げた事例では士族門中でありながら傍系の遺骨を一緒に葬っていた砂辺門中の人びとが家族墓を作るようになり、さらにまた門中墓を共同で使用しようとしているという墓制の変化の兆しをみることができた。その点についても注視していきたい。

【註】

(註1) この調査については2018年の大湾ゆかりの報告によって詳細を知ることができる。

(註2) 役員の年齢は2005年当時のものである。

【参考文献】

- 大湾 ゆかり 2018「那覇市の古墓調査2－項氏の墓の内部構造－」『沖縄県立博物館・美術館博物館紀要』11
- 越智 郁乃 2018『動く墓 沖縄の都市移住者と祖先祭祀』森話社
- 武井 基晃 2012「祭祀を続けるために：沖縄の祖先祭祀における代行者と禁忌の容認」『現代民俗学研究』4
- 2018「史縁の継続性・遡及性」『現代民俗学のフィールド』吉川弘文館
- 長嶺 操 2012「糸満漁民の分村と墓：八重瀬町字港川の場合」『沖縄民俗研究』30 沖縄民俗学会
- 早坂 優子 2018「移住者による墓の新設と故郷の墓：沖縄県本島中南部への移住者の事例から」『沖縄民俗研究』35号